

素晴らしいミツバチの世界

札幌山本養蜂園社長 久世佳弘

養蜂とは、ハチミツの素晴しさとは。永年蜂を愛し続けてきた久世佳弘氏が語る、素晴らしいミツバチの世界!!

ローヤルゼリーの不思議

ミツバチは、蜂蜜をはじめローヤルゼリー・プロポリス・ビーポーレン（花粉荷）、蜂の子といった健康補助食品に蜜蠟、花粉交配、蜂針療法とハチだからと云うわけでは有りませんが8種類もの違ったかたちで私たちの健康や食膳に貢献をしてくれています。

の働き蜂〔雌蜂（受精卵）〕と数百匹の雄蜂（無精卵）から成り立ち統率のとれた行動をします。

女王蜂は若い働き蜂からローヤルゼリーのみを与えられ卵を産むことだけが仕事です。一日で1500個前後の卵を産みますが、重量は自分の体重に匹敵します。しかも春先から秋おそくまで毎日のように産み続けますので、その総重量は1年間で自分の体重の200倍から250倍に達し、生命力も働き蜂の30～40倍もあります。その原動力がローヤルゼリーなのです。

働き蜂の過酷な作業

働き蜂の食料は、花の蜜だけと思われがちですが、花粉が重要な栄養源です（この花粉のおかげでハチミツが花の蜜とは違う栄養価の高い食品に成るのです。）働き蜂は、通常40日前後の寿命です。羽化後、間もなく仕事を始めますが日齢で作業内容が変り、次に産まれ来る妹や弟達の

内勤します。後半の20日位を外へ出て花の蜜や花粉、プロポリスを集め外勤蜂となります。

外勤蜂が花蜜の在処をどの様にして知り得るかと言いますと、まず先発の働き蜂が蜜源を探し当てて戻つくると、尻振りをしながら円形や8の字形のダンスをします。その尻振りダンスの中に蜜源の距離と方角が示されていて、豊富な蜜源を見つけた蜂ほど激しいダンスをします。それを見ていた他の外勤蜂は一齊にその方角に飛び立ち、花の蜜を集め来ます。一匹の働き蜂が一回に持



ミツバチの家族は、一匹の女王蜂と単箱で2万匹前後（2段重ね箱で4～5万、3段重ねでは7～8万匹）





株式会社札幌山本養蜂園社長
久世佳弘

おいしい天然ハチミツのご用命は

札幌山本養蜂園

T E L 011-873-3838
住 所 札幌市白石区北郷2条7丁目6の13
事業内容 ハチミツ関連商品
養蜂器具卸販売

久世佳弘 プロフィール

昭和14年
北海道常呂町生まれ。
昭和47年
(株)山本養蜂園札幌営業所勤務。
平成6年
(株)札幌山本養蜂園として独立。

そうして秋になりたっぷりと食料を貯えて、寒さしのぎをしながらじつと冬越しをしていると、5~6カ月も生きています。それは女王蜂や次に産まれ来る妹たちの世話が必要な為であります。それだけに夏の間の子育てや集蜜作業がいかに過

酷な労働かが判ります。その代償が私たちに美味しい蜂蜜を提供してくれる事に成るわけです。だから養蜂家はミツバチを大事に扱い、一生懸命手入れをしてくれます。

そして自分たちの食事や蜜蝋の製造に費やした蜜の量を差し引いて、自分たちの保存食として残ったハチミツが小さなスプーン一杯位(5~6g)の量なのです。

ち帰つてくる蜜の量は、40~50ミリグラムです。1日に10~15回集蜜飛をしますので、約20日間で10~12gになります。花の蜜、そのままは糖度が約40%と水分が多く保存に適していません。そこで内勤の働き蜂が羽根を使って水分を蒸発させ保存に適した糖度約80%位に濃縮します。そして自分たちの食事や蜜蝋の製造に費やした蜜の量を差し引いて、自分たちの保存食として残ったハチミツが小さなスプーン一杯位(5~6g)



雄蜂は通常全体の1%位がおり必要な時に応じて産み分けされ、普段は働き蜂から餌をもらひなにもせずぶらぶらしており、平均寿命は30日位です。雄蜂は、天気の良い午後になると女王蜂と結婚飛行(交尾)が出来るチャンスを得るため、巣から出で飛び立ちます。うまく交尾に成功しても女王蜂に精子が入った袋をもつて行かれますから、それは即、死を意味します。

農業への貢献

また、ミツバチは花から蜜や花粉をもらう換りに農業にも多大な貢献をもたらしています。メロン、スイカ、イチゴ、などハウス栽培の受粉作業に今はミツバチを欠かすことが出来ません。梅、桃、柿、りんご、さくらんぼ等の果樹や、カボチャ、そば、花豆といった野菜や穀物の受粉の手伝いもしています。

羽化寸前の蜂の子(主に雄蜂)は昔から佃煮にしたりして、栄養豊富な珍味として重宝されていますが、最近の研究で、蜂產品5番目の優れた健康補助食品としても注目されています。それは、蜂蜜や花粉、ローヤルゼリーを与えられ、育てられているからに他なりません。

優れた栄養補助食品 蜂の子



※下記著書を参考に記述しました。(発行順)

●アニマ 「特集ミツバチの神話」
平凡社発行(昭和53年3月号)

ミツバチと人間
日本養蜂振興会発行(昭和55年)

●渡辺孝著
井上敦夫著
(株)リヨン社発行、(平成1年)

